

NPO

多くの団体と連携して遠野被災地支援ボランティア「遠野まごころネット」設立

遠野市

千葉 和 NPO 法人遠野エコネット代表理事

取材日 2011.8.4

■ NPO 法人遠野エコネット

エコツーリズムの考え方を取り入れ、行政とパートナーシップを組み合わせながら地元に着した自然環境保全活動を行うNPO法人。

■ 遠野市被災地支援ネットワーク「遠野まごころネット（遠野被災地支援ボランティア）」

東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者を支援しようと結成されたボランティア集団。

3月11日 14時46分

遠野市内の図書館の視聴覚ホールで、自ら代表理事を務めるNPO法人遠野エコネットのスタッフと共に映画上映会を行っていた。揺れを感じた時、スタッフの携帯電話の緊急地震速報が鳴り響いた。その時初めて携帯電話の緊急地震速報を聞いたので、最初は何の音が鳴ったのか理解することができなかった。揺れは次第に大きくなり、電気が消えた。図書館だったので、本が崩れるのを防ぐため必死に本棚を抑えていたが、本は一冊も落ちる事はなかった。女性スタッフが泣き叫んでいるのも見えたが、意外にも多くのスタッフは冷静だった。

尋常な揺れではなかったので、震源地がわからないが大きな災害だろうと直感した。津波の状況は後にラジオで知った。当日、図書館近くの川を見に行った人から「川が濁っているのを見た」と聞いた。山が崩れ、泥水が流れたせいだ。

自宅は遠野市内から車で30分程の場所にある。中学校のPTA会長をしていたため、状況を確認するべく真っ先に中学校へ向かった。その後、子どもが通う小学校へ向かい、車で一緒に自宅へ戻った。道路は信号が消え、屋根の瓦などが落ちていた。

自宅は薪ストーブを使用しており、水は湧水をひき、ガスもプロパンガスだった。電気は3日で復旧し、食料は普段から蓄えることを習慣づけていたので、それ程困る事はなかった。ラジオも常備していたので、ある程度の情報を得ることもできた。一番困ったのはガソリンだ。3月11日当日に給油する予定でいたため、所有している2台の車は共にガソリンがほとんど入っていなかった。

「遠野まごころネット」設立

遠野の風土と観光を考える連絡協議会を立ち上げたばかりだった。普段から地域づくりに関わる活動を行っていたので、このネットワークを活かし、「遠野まごころネット」（遠野被災地支援ボラ



ンティア) を設立し、災害支援活動を行っている。個々の力は弱くとも、多くの団体と連携することで機動力が増し、今回このネットワークが大きな役割を担うことができた。

車社会の弊害

車社会にのみ込まれていたことを痛感した。震災後2週間は、動きたくともガソリンがないために何もできず、フラストレーションがたまった。車がないと何も支援できないことは、今回の教訓にしなければいけないと思う。高齢者や車を運転できない子どもたちなど弱者目線に立ったコンパクトな町づくりの構築も必要と感じた。

被災地に入って感じたこと

日々感動の連続だった。支援活動を苦に思うことはまったくなかった。偶然訪れた避難所で、消息不明だった人との再会を果たしたこともあった。また、被災者には感謝してもらえた。

震災直後から4月初めにかけては、支援物資を運ぶために甚大な被害を受けた大槌町、陸前高田市へ向かった。釜石市では、川を挟んで天国と地獄の差がはっきりと見て取れる風景に変わっていた。津波がビルの3階まで到達した形跡を見ても、すべてが想

像を絶していた。
同じ避難所でも、被害が全くなかった人、電気が止まっただけの人、自宅が床上浸水した人、自宅を流された人、家族や身内を失った人、それぞれ被災者でも被害の差があり、対応の難しさも強く感じた。

今後の活動

これから寒くなり冬になるにつれて、個々の仮設住宅に入居している被災者の自殺が増える可能性がある。1人の自殺者もださないために、仮設住宅にいる被災者に対して、孤立させることのないよう交流の場を設けていきたい。行政も復興に向けてがんばっているが、個々の1人ひとりに対応していくためには、ボランティアの力が必要になってくると思う。
今後は、自然と共存した地域づくりをしていきたい。三陸から、世界のモデル地域になる1つのビジョンを作りあげていきたいとも思っている。自然エネルギーだけではなく、暮らし方を変えていかなければいけない。50年先、100年先の未来に、

子ども達にどういふものを残せるか、今回の震災を契機にきちんと向き合っていかなければ、二度とチャンスはないと思っている。

震災を振り返り

正直、振り返る状態ではない。マスコミの震災に関する報道も減ってきた。ボランティアの数も減っている。常時240-250人はいるが、夏休みに入った今でもボランティアは足りていない状況である。運営しているスタッフの人材育成も課題のひとつだ。

まごごろネットを立ち上げる時、「最低5年は活動をしていかなければならない。長期戦になる」と申し合わせた。ボランティアは減少し、被災者は孤立化する。これからの正念場を迎えると思っている。動き続けながら、失敗しながら、ベストではないかもしれないが、最良を目指して活動している。

市民レベルのネットワークづくりの重要性を今回改めて強く認識した。

個人

盛岡市

つながりと信頼関係と多くの善意で、不可能が可能に。

石田 朋子 Moonbow 地域資源プロデューサー、わわプロジェクト岩手エリア プロジェクトリーダー

取材日 2011.8.4

■ Moonbow

盛岡の地域資源の掘り起こしと魅力発信、コミュニティと人材育成に重点を置いた長期ビジョンのまちづくりに取り組む。

■ ソーシャルクリエイティブプラットフォーム わわプロジェクト

復興活動に取り組む人々と支援者を結ぶため、被災地域で活動する人との連携、活動拠点の整備、新聞・Web-Site を活用した地域情報の発信を行う。

3月11日 14時46分

盛岡の自宅の仕事をしていた。これから出かけようと思った時に、今まで体験したことのない大きな揺れを感じた。家族と近所の人々の安否確認をした後、ラジオを確認しながらすぐに車で携帯充電器、電池、ガスコンロのガス、保存食を買いに出かけた。いち早く行動したので、並ぶことなく購入することができた。
翌日は自転車関係先の安否確認、県庁・市役所での情報収集に奔走した。盛岡市内はいつも見る住み慣れた町の光景ではなかった。車が少なく、空気が澄んでのんびりとしているようにも思えた。ライフラインは電気が2日目の夜に復

旧したので、(水道は途中半日断水したが3日目には復旧) テレビとインターネットから情報を収集、「何かをしなればならない」と翌日泊まり込みの準備をして出かけた。

「SAVE IWATE」結成

震災から2日後の3月13日、震災前からつながりのあった仲間と先輩方と一緒に東日本大震災被災地支援チーム「SAVE IWATE」を立ち上げた。中には3月12日から被災地に入り活動していた仲間もいた。

「SAVE IWATE」では1週間、ほぼ不眠不休で活動に取り組んだ。被災者名簿や現地状況をホー